



魔法媚薬

即効性と持続性に優れ、驚異的な浸透力を持ち、飲ませても皮膚に塗布しても強烈な快感効果を発揮する媚薬。

本来は闇ルートで取引されている薬品だが、

昨今は一般市民にも一部流通しており、アダマンティウス・リベラティオが警戒する薬物の一つである。

その原料は特定のマーズゴが作り出していると言われているが、その実態は全くと言っていいほど掴めていない……。

今回アイシヤは魔法媚薬の取引が行われるという情報を得た突入作戦の護衛として同行していた。

こういった取引にはマーゴが用心棒がいる事が多い為、マーゴハンターが同行するのだ。

取引現場に侵入すると絶賛取引の真っ最中だったのだが、その中のバイヤーと思われる男が、

”自分達は魔法媚薬の原材料を提供してくれるマーゴが住んでいる場所から来た“

という発言をしていた事で逮捕の優先順位が決まった。

「まごごは……森？」

だが突入作戦は用心棒をしていたマーゴに
作戦班の存在が露見してしまい、
状況が混乱する。

アイシヤはその場のマーゴ全てを討伐し、件のバイヤーを追ったが、
彼らが逃げた扉に続いて入ると、そこは森の中だった。

アイシヤは困惑したが、このように空間を操作する
マーゴには幾度も遭遇してきた。

残念ながら通信や自分が今いる場所は分からない状態だ。
なのでアイシヤは脱出の為、この場を支配するマーゴを探すことにした。

何ーん？…うん？…はーん！



森の中を歩く事数十分、小型マーゴの襲撃を受けた。

小型マーゴは俊敏で、だが攻撃はしてこない、ただアイシャの身体に絡みつこうとしてくる。絡みつくると小型マーゴの中心部が開き発光する。

拘束する力が強いので引き剥がすのが手間で厄介だと思いが、それによってアイシャの体に何かが起きてはいるわけではない。しかし今のような状況にアイシャは心当たりがあった。

「これ…もしかしたらパワードレインかな？」

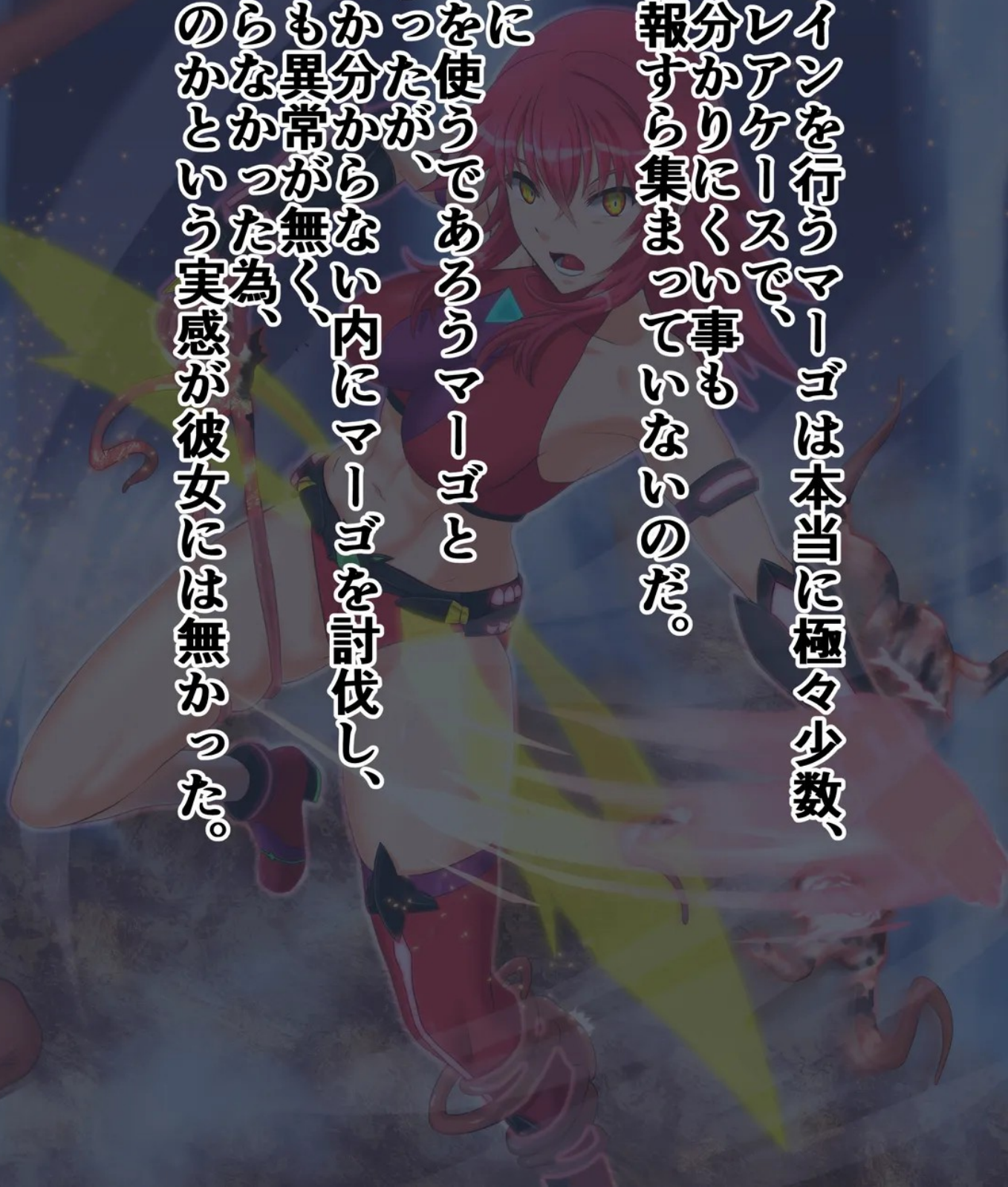
——パワードレイン——

一部のマージゴが使う特殊なエナジードレイン、特徴としては、対象者自身が何をドレインされているかが極めて分かり辛いという事である。

エナジードレインは吸収の際には強烈な快感を伴うなどの実感が伴うのだが、パワードレインにはそういう実感が一切無い。その為対処が遅れてしまい、パワードレインによって何が吸われているかを実感する時はすでに手遅れになっているという事になってしまう。

だがパワーワードレインを行うマーゴは本当に極々少数、
出会う事自体がレアケースで、
何をされたかが分かりにくい事も
あって十分な情報すら集まっていけないのだ。

アイシヤも過去に
パワーワードレインを使うであろうマーゴと
遭遇した事があったが、
結局何をされたか分からない内にマーゴを討伐し、
その後も検査でも異常が無く、
何の問題も起こらなかった為、
どういふものなのかという実感が彼女には無かった。



「くっ……!! どれだけいるのよ。」

あれから数十分、小型マーゴの襲撃は絶え間なく行われている、
大体が十数匹単位で襲い掛かってくるが、
飛び掛かってくるものは出来るだけ倒す、
身体に絡みついたものは焼きながら引き剥がす。
多少丈夫な小型マーゴとはいえ、
アイシヤならば対処自体は難しくない、
だが、動きが俊敏な為、必ず体のどこかに絡みつかれてしまう。

何をされているか分からない状況に一抹の不安を覚えたアイシヤは、

（ちよつと上に上がってみるか。）

と左足に収められているアニマウェポンを起動しようする。



「えっ!？」

だがアイシャのアニマウエポンは起動しなかった。

（くっ…やっぱり、か。）

アイシャは真っ先にパワードレインの影響だと確信する、

（アニマウエポンを無効化するって事…!!??マズイ!）

そう思った瞬間、
アイシャのアニマウエポンが次々に分解していく…。

明確な対処法が無い今の状況で
武器を失う焦りが一瞬の油断を生む。

手足に小型マーゴが絡みつき、
腕は後ろ手に拘束するような形で絡みつかれてしまう。

「うーんうーん！」



腕の小型マーゴを振り解こうとするが、
その拘束力はアイシヤの膂力を上回っており、
引き剥がすのにアシマウエポンの力で焼きながら
行つていただけに、アシマウエポンの無い状態での
脱出は難しい。

（一旦離れないと、マズイか……）

背後から新たに迫る小型マールゴに、
一旦逃げる判断をするアイシヤ。

だが振り向いた瞬間、先程まで開けていた筈の場所にアイシヤの道を
塞ぐ様に木がそびえ立っていた。

驚くアイシヤ、

瞬間、木から何かが飛び出し、

アイシヤの頭を捕まえその口に何かをねじ込んできた。



「んぐらう…んぐらうー」

（しまった…んうう!!）

アイシヤの口に捻じ込まれた触手がドクドクと何かを
無理矢理流し込む。
樹木はそのままビキビキと音を立てながら姿を変えていく。



「んごあ……んえ……んう……ん……ん……」

(あう……早く、振りほどか……ない……と……
……♡あう?♡♡♡♡)

この状況から脱しようとしたアイシヤだが
その視界と思考にピンクの霧がかかる。



「んう…んむ、んう
ごく、ごく…」

「…んあう…!!?
今…わたし、イカされ…た!?!」

口の中で触手から溢れだしたマージョの液体を
飲み下していくアイシヤ、
吐き出そうとするが出来ず、
軽い絶頂に見舞われる。
そしてアイシヤはこの液体の正体に気付いた。

「これ…魔法媚薬………」

アイシヤは過去に悪辣な人間達に人質を取られ、
条件として一晩慰み者にされた事があった。
その事件は無事に解決したが、
その際に魔法媚薬を使われた経験があったので、
その感覚を覚えていたのだ。

へ…でも、こんな、どうして?…
吐き出さ…ないと…♡なのに…♡♡

流通している魔法媚薬は
原液のままでは人間が耐える事が出来ない。
なので最低でも10倍以上に薄められている。

当時アイシヤを苦しめた魔法媚薬は10倍以上に薄められ
様々なドラッグをブレンドした人間用のものだった。
だが今アイシヤが飲み下している魔法媚薬は
その原液なのである。



「んっ……んぐっ……」

「……だ、めだ、このまま……じゃあ……」

アイシヤは魔法媚薬に翻弄され蕩けた意識から自我を取り戻す、
その体は過去に淫らに改造された経験があるとはいえその
精神力でこれまで危機を乗り越えてきた歴戦のマーゴハンター
ならでは胆力と言えた、
だが。





触手が更に追い打ちをかける様に
腔内、アナルにも侵入する。

そして先程までよりも大量の魔法媚薬を放出され、
アイシヤの体は先程よりも大きな絶頂に見舞われる。

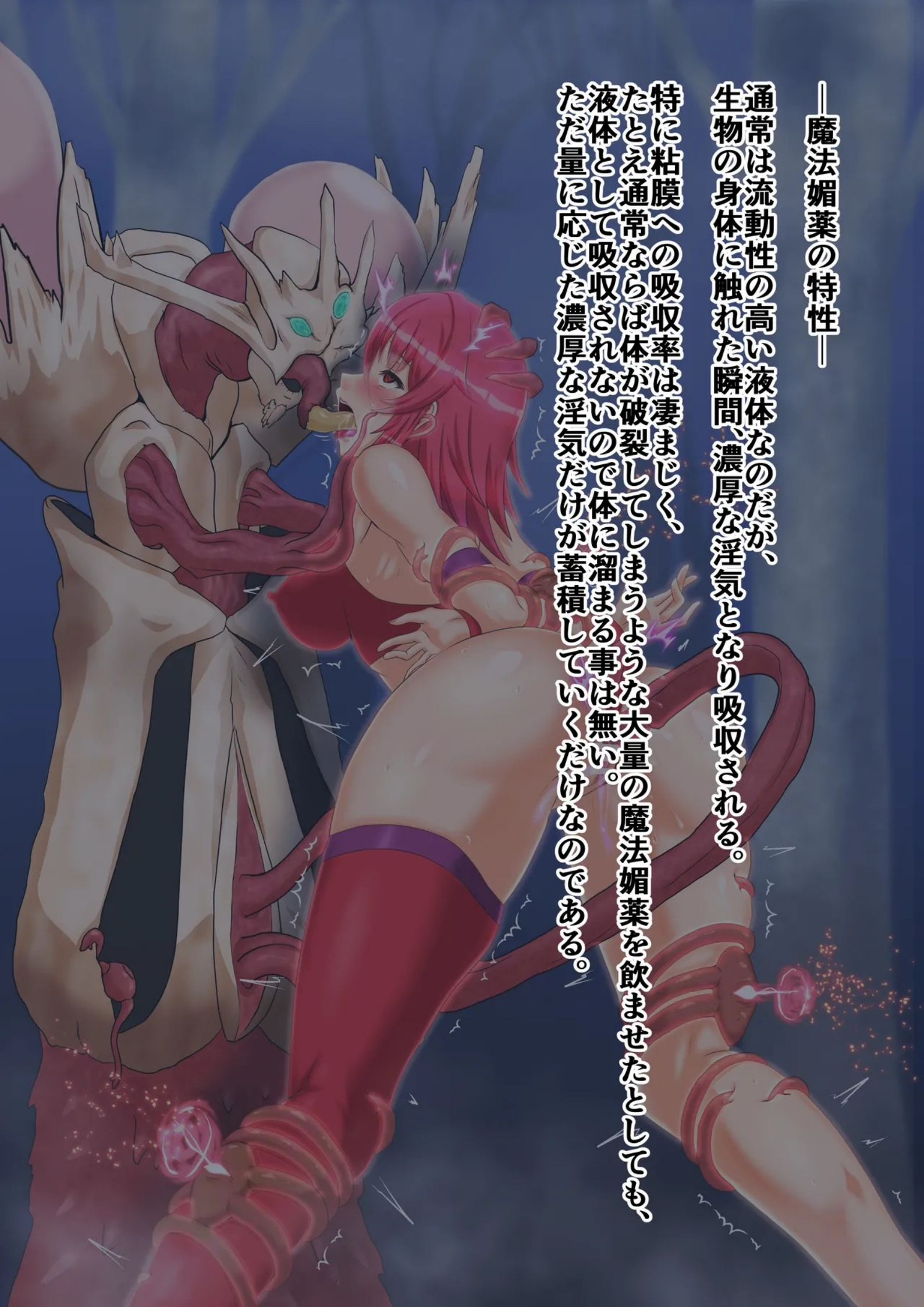
びくびくと震える足に入りきらなかった魔法媚薬がアイシヤの足を伝うが
流れた液体は途中でぼんやりと輝き、
アイシヤの体に吸収されていく。



—魔法媚薬の特性—

通常は流動性の高い液体なのだが、生物の身体に触れた瞬間、濃厚な淫気となり吸収される。

特に粘膜への吸収率は凄まじく、たとえ通常ならば体が破裂してしまうような大量の魔法媚薬を飲ませたとしても、液体として吸収されないのだから溜まる事は無い。ただ量に依じた濃厚な淫気だけが蓄積していくだけなのである。



「おっ！♡ おっ！♡ んうう♡♡♡」

3カ所から注ぎ込まれる
大量の魔法媚薬に苦悶の声を上げるアイシヤ、
だがそれをつかの間の事で、



「んうう、♡んお…♡んぶう♡…♡ふう…♡♡♡。」「

♡んおう！♡♡♡…♡そん、な、あそこ、おしり…♡なんて、だめえ…♡♡♡しきゅ…♡う、♡しびれ、りゅ…♡♡♡



子宮から魔法媚薬が吸収されると、
過去にされた改造の所為でその効果が倍になってアイシヤの
身体中に浸透してゆき、
大小様々な絶頂が彼女の全身で巻き起こる。



「…んう♡♡♡♡♡おう♡♡♡♡♡
おん♡♡♡♡♡ん♡♡♡♡♡」





「……ん……うぁ……はっ……はっ……。」

魔法媚薬を大量に飲まされ意識が朦朧としているアイシヤを捕らえていたマーゴは3穴から触手を抜く。

次いでアイシヤの周りに新たな樹木が出現する、樹木の先端には半透明な膜に包まれた大量の魔法媚薬を讀えている。その樹木から触手が伸び、アイシヤの体に絡みつく。

魔法媚薬を注いでいたマーゴは触手にアイシヤを受け渡すと、メキメキと音を立てながら小さくなり、地面にその姿を消した。

触手はアイシヤを縛り、無様な恰好で固定する。



「ん……う……お♡……。」

アイシヤの3穴に再び触手が挿入される、

本来の彼女の力であれば戒めている触手を引きちぎる事も可能なはずだが、魔法媚薬に蕩けさせられた体ではろくな抵抗も出来ず、されるがままに再びの挿入も許してしまうどころか、それだけで軽い絶頂を迎えてしまう。



だが触手は挿入されているだけで何もされていない。

（……いま……ならあ……あう……くう……）

思考はまだ満足に廻らないが、意識にかかるピンクの雷を振り払い、エネルギーをまだ吸われていない事に気付いたアイシャはアニマウェポンを顕現させようとする。だが、アニマウェポンをはまだアイシャの意思に反応しない、おそらくはまだ小型マーゴの能力の効果が残っているのだからとアイシャは判断し、次の脱出手段を考え始める。

「うわー、うわー」



触手に空いた穴から先端に針のようなものが付いた触手が伸び、それが次々とアイシヤの体に突き刺さっていく。

（んああ！、ふえ？…なんれ…？？）

アイシヤの身体には常に強力なバリアが張られている。エネルギーが十分であれば、寝ていたり無意識下でも張れていた筈なのだが、針は次々とアイシヤの体に突き刺さっていく。魔法薬のお陰か、刺さる痛みは殆ど感じないが、思いがけない事態にアイシヤは困惑する。



A full-page illustration of a pink-haired anime girl with a large, muscular leg, wearing a red bikini and a green gem necklace. She is surrounded by green tentacles and a large, muscular arm. The background is dark blue with pink clouds and orange sparks.

周りにそびえ立った樹木の膜袋がぶるりと震えたかと思うと、体中に突き立てられた針から魔法媚薬が注射されていく。

（んくうううー♡♡♡♡♡
こ…れ…さ…き…ま…で…は…♡♡♡♡♡
くらべものについで♡♡♡♡♡）

魔法媚薬は生物に触れると液体としての性質を無くし、濃厚な淫気を含んだエネルギーに変化する。

血中で淫気となった魔法媚薬は血流に乗ってアイシャの体を巡り、快感そのものが全身に広がっていく。先程の飲ませられる際に覚えた快感とは違い、体の中から膨れ上がる快感に一線を超えまいと必死に耐えるアイシャだったが。



(あううっ あああ!♡♡、これはああ!♡♡♡♡♡
たえられにやい!♡♡ イクううっ!♡♡♡♡♡
いっぐうううう♡♡♡♡♡!)



更に口、膣、アナルに挿入された触手から魔法媚薬が注入され、耐えられなくなったアイシヤの快感が堰を切る。彼女の体がガクガクと震え人形のように硬直し、熱い愛液のシャワーを迸らせた。

短時間に大量に蓄積された魔法媚薬の効果で異常発情状態にあった体に更に血管からの魔法媚薬の投与にアイシヤの身体は耐えられず、身体中で快感の稲妻が絶え間なく炸裂し連続絶頂状態に陥ってしまった。

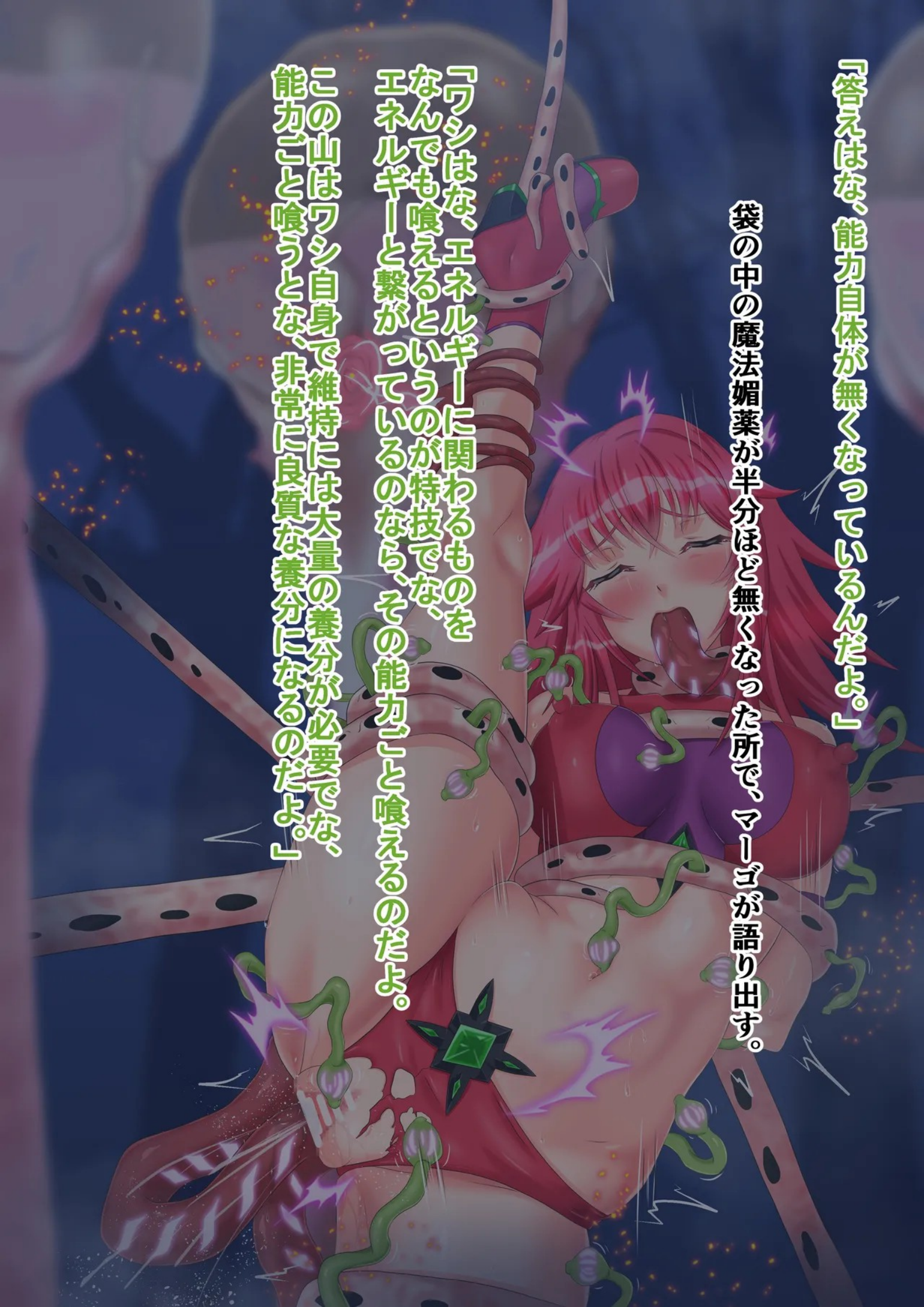


「答えはな、能力自体が無くなっているんだよ。」

袋の中の魔法媚薬が半分ほど無くなった所で、マーゴが語り出す。

「ワシはな、エネルギーに関わるものをなんでも喰えるというのが特技でな、エネルギーと繋がっているのなら、その能力ごと喰えるのだよ。」

この山はワシ自身で維持には大量の養分が必要でな、能力ごと喰うとな、非常に良質な養分になるのだよ。」



「んっ！？………！？」

（……！？、そんな！？）

馬鹿な、とアイシヤは思ったかった、

だが先程アニマウェポンを顕現出来なかった時に感じた違和感、エネルギーが十分にある状態でもバリアが張れない事、

彼女の根源にある力はマーゴハンターに成った時から常にあり続けたもの。

たとえ今のよう快感の霧に意識を奪われかけていても、それでも少しは感じられたはずだ、
感じられない事を相手の能力により封じられたと思っていた、

思い込んでいた。

だがマーゴの説明により
アイシヤは自分の能力であるが故に納得してしまったのだ。

「んあっ! うう! んううう!」

「いやっ! そんなのは駄目!
あふああっ♡♡♡!」

手足に絡みつく触手から噴出している赤く輝く塵、
それは擦り碎かれたアイシヤのマーゴハンターの能力そのもので
よく見れば塵は次々に木や土に吸い込まれていく。



「んっうっうっ！んっうっん！」

「いやっ！こんなのためっダダメー！」

理解してしまえばもう自分の力を奪われていく事が如実に自覚できてしまう、
自分の中から奪われてはいけないものが奪われている感覚に
かつてない程の恐怖を覚えるアイシャ、抵抗をしなければと
思考はまとまらないが兎に角何かを、抵抗をしなければと
無理矢理にも拘束を解こうと足掻く。



(あへえ♡♡♡♡♡ひゃらぁ♡♡♡♡♡こんにゃ、の、ひゃぁ、あふぁあぁあ♡♡♡!)

大量に注いだ為、樹木の中の魔法媚薬が一気に無くなるが、すぐさま新しい魔法媚薬が補充され、注入が途切れる事は無い。

「もう何をしてても無駄だよ、ワシに食われた力は二度と元には戻らん、
おぬしはこの山の養分として生きていくしかないのだよ、
ククク。」



A full-page illustration of a pink-haired anime girl with a red and purple outfit, surrounded by green tentacles and purple energy. She has a shocked expression. Japanese text on the right reads: 「んおう♡!、んん♡♡!、ん♡♡♡!」.

（いや、あ、あうっ♡♡♡！
うめ、ちかりゃあ、がなくなりゃう♡の、イクラう♡♡♡♡♡
きもちいい♡♡♡！あふああう♡♡♡、イクラ！♡♡♡♡♡
いきゅうううっ♡♡♡♡♡！）

もう何度目かになる魔法媚薬の補充が行われる、

甘美な悦楽の沼に沈められ常に絶頂状態から降りられず、
魔法媚薬を注がれる事にも、力を奪われる事自体にも快感を覚えてしまった体は
もうどうする事も出来ない領域に突入してしまっている。



いっく♡ひゃめ、イクイクイクう♡!
んおあ…いっくう♡♡♡♡♡!
じえんぶ…ふはああああん♡♡♡♡♡!
イクウウウウ♡♡♡♡♡!

延々とアイシャはその力そのものを奪われながら魔法媚薬を注がれ続け、
逃れられぬ快楽と絶頂に染め上げられていくのだった…。





「おう……う……お……」。

あれからどの位の時間が経ったのか、

アイシャの能力を奪った小型マーゴが1匹彼女の膣内から這い出てくる、
続いて2匹、3匹と這い出して来る小型マーゴ。
彼女の身体は小型マーゴを増やす事に使われていた。

魔法媚薬による凌辱に敗北したアイシャは樹木の一部として取り込まれた。
彼女を捕らえている樹木はモンス・ロディアの胃に相当するもので、
取り込んだ者の体の内部にまで根が入り込み内臓などに融合することで
食料として生かし続ける。

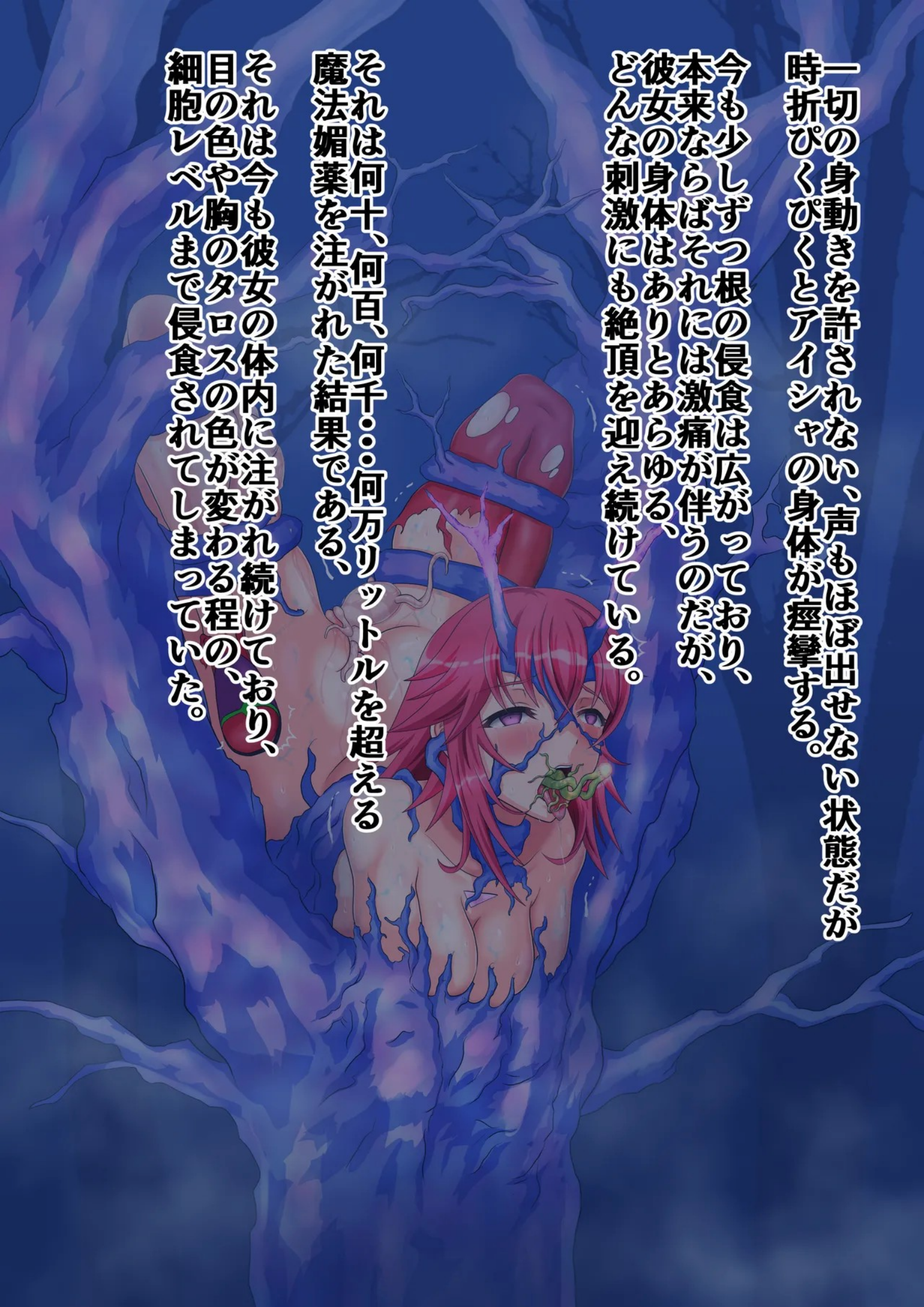


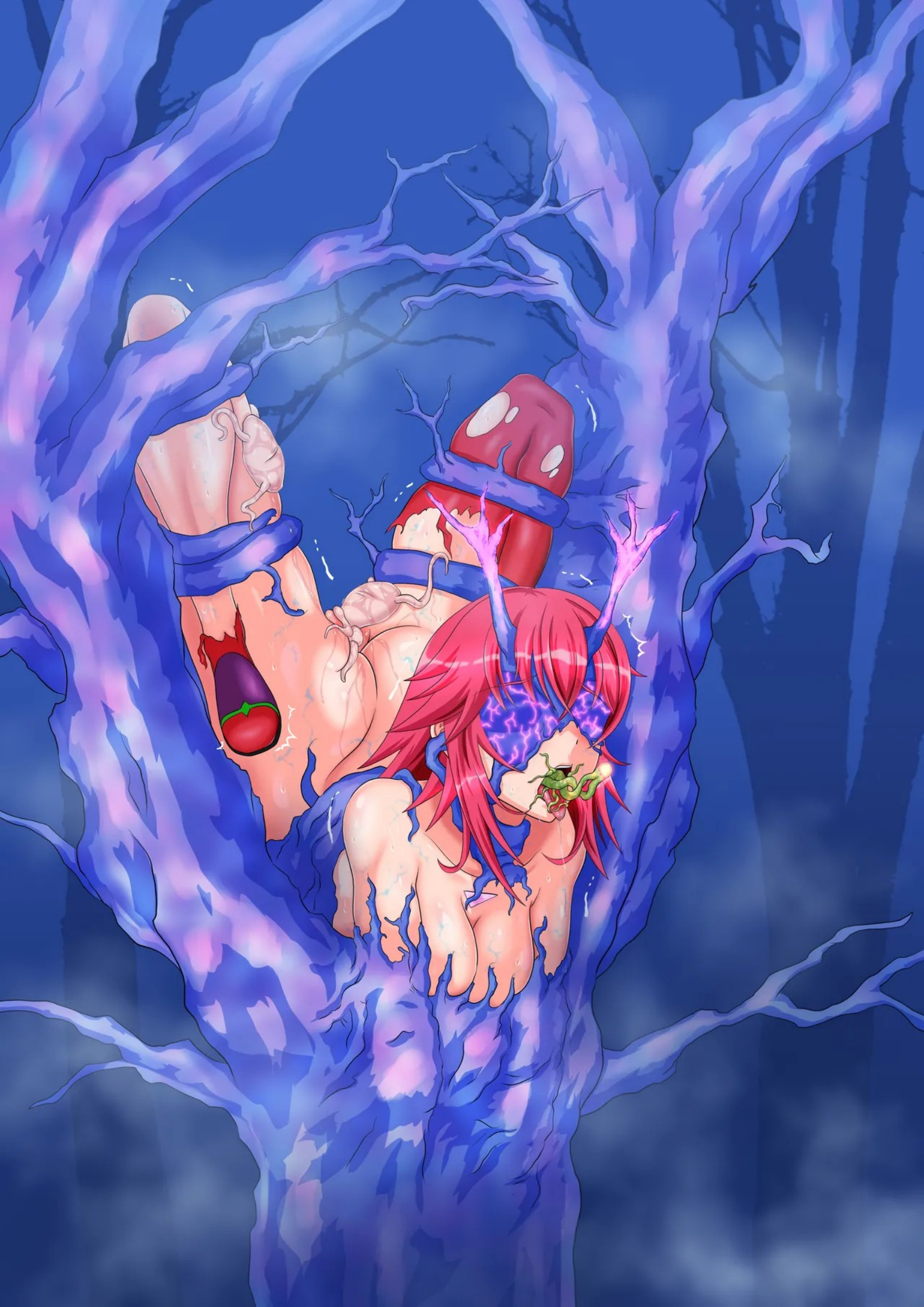
一切の身動きを許されない、声もほぼ出せない状態だが
時折びくびくとアイシヤの身体が痙攣する。

今も少しづつ根の侵食は広がっており、
本来ならばそれには激痛が伴うのだが、
彼女の身体はありとあらゆる、
どんな刺激にも絶頂を迎え続けている。

それは何十、何百、何千…何万リットルを超える
魔法媚薬を注がれた結果である、

それは今も彼女の体内に注がれ続けており、
目の色や胸のタロスの色が変わる程の、
細胞レベルまで侵食されてしまっていた。





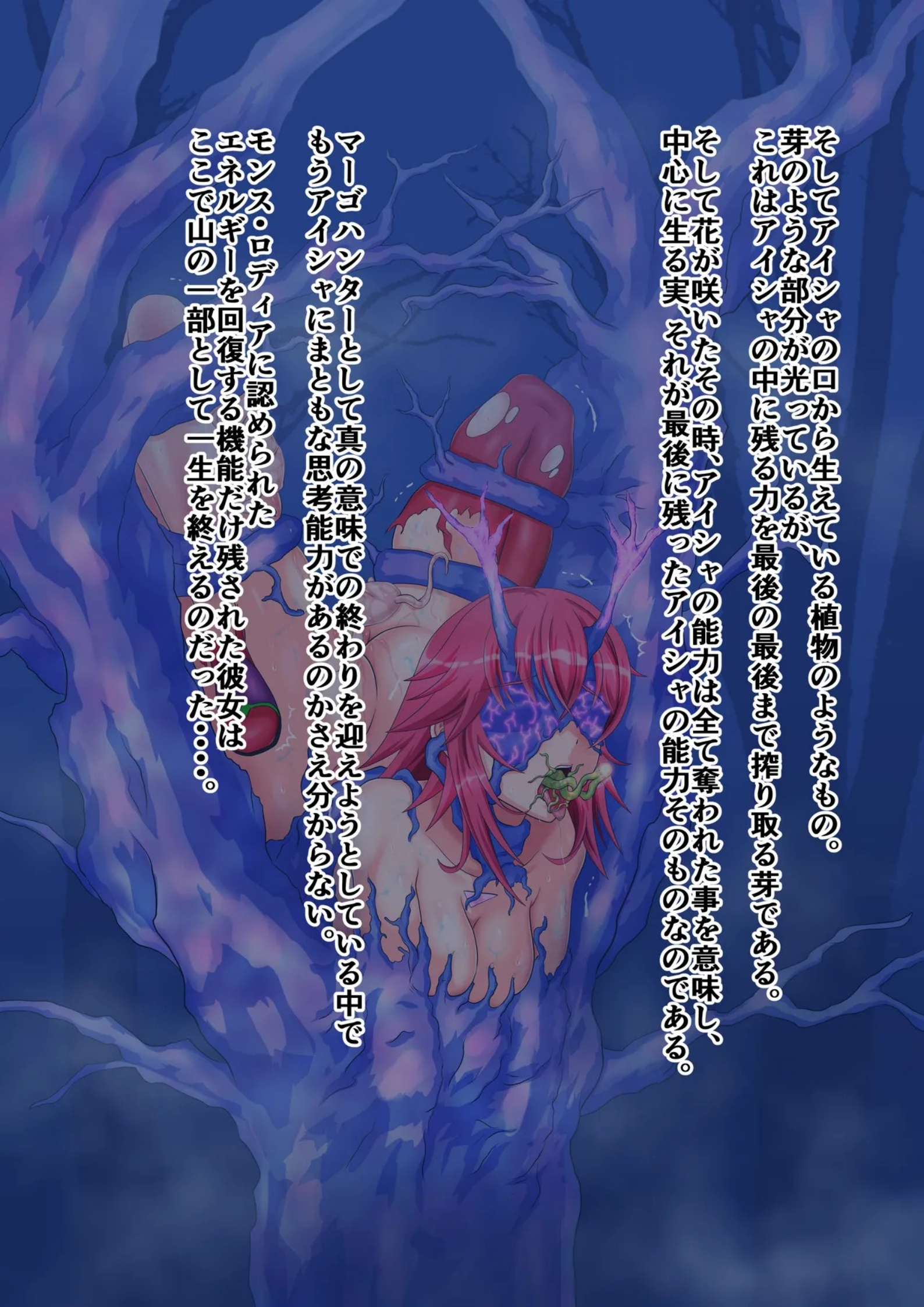
そしてアイシヤの口から生えている植物のようなもの。

芽のような部分が光っているが、これはアイシヤの中に残る力を最後の最後まで搾り取る芽である。

そして花が咲いたその時、アイシヤの能力は全て奪われた事を意味し、中心に生る実、それが最後に残ったアイシヤの能力そのものなのである。

マーゴハンターとして真の意味での終わりを迎えようとしている中でもうアイシヤにまともな思考能力があるのかさえ分からない。

モンス・ロディアに認められた
エネルギーを回復する機能だけ残された彼女は
ここで山の一部として一生を終えるのだった……。



が、彼女はマーゴハンターの中でも
指折りの強さを持つマーゴハンターである、

そして人望も厚く交友関係も広い、
彼女の危機となれば動く者も一人や二人ではない、

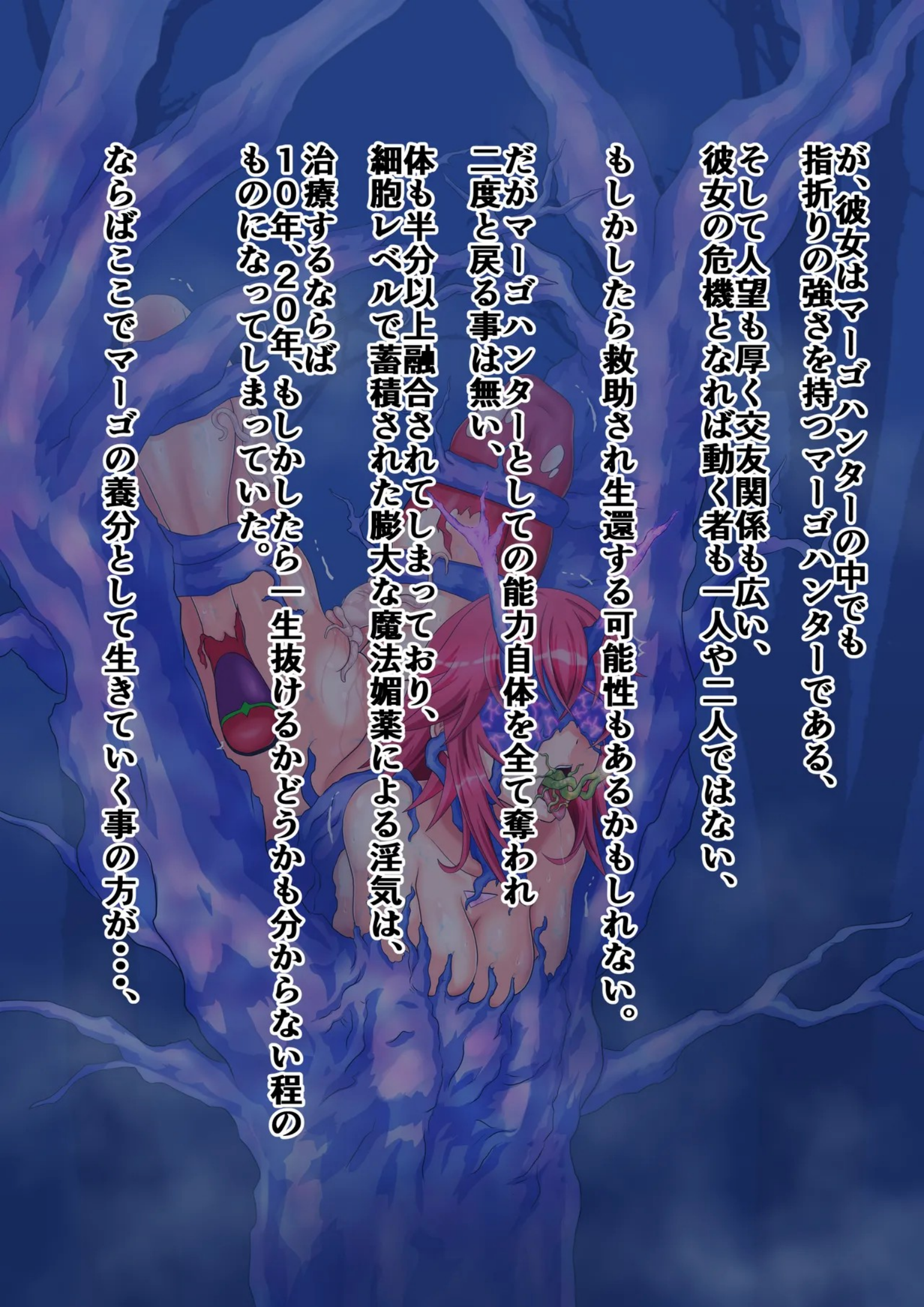
もしかしたら救助され生還する可能性もあるかもしれない。

だがマーゴハンターとしての能力自体を全て奪われ
二度と戻る事は無い、

体も半分以上融合されてしまっており、
細胞レベルで蓄積された膨大な魔法媚薬による淫気は、

治療するならば
10年、20年、もしかしたら一生抜けるかどうか分からない程の
ものになってしまっていた。

ならばここでマーゴの養分として生きていく事の方が…、



—それが彼女の幸せなのかもしれない。—













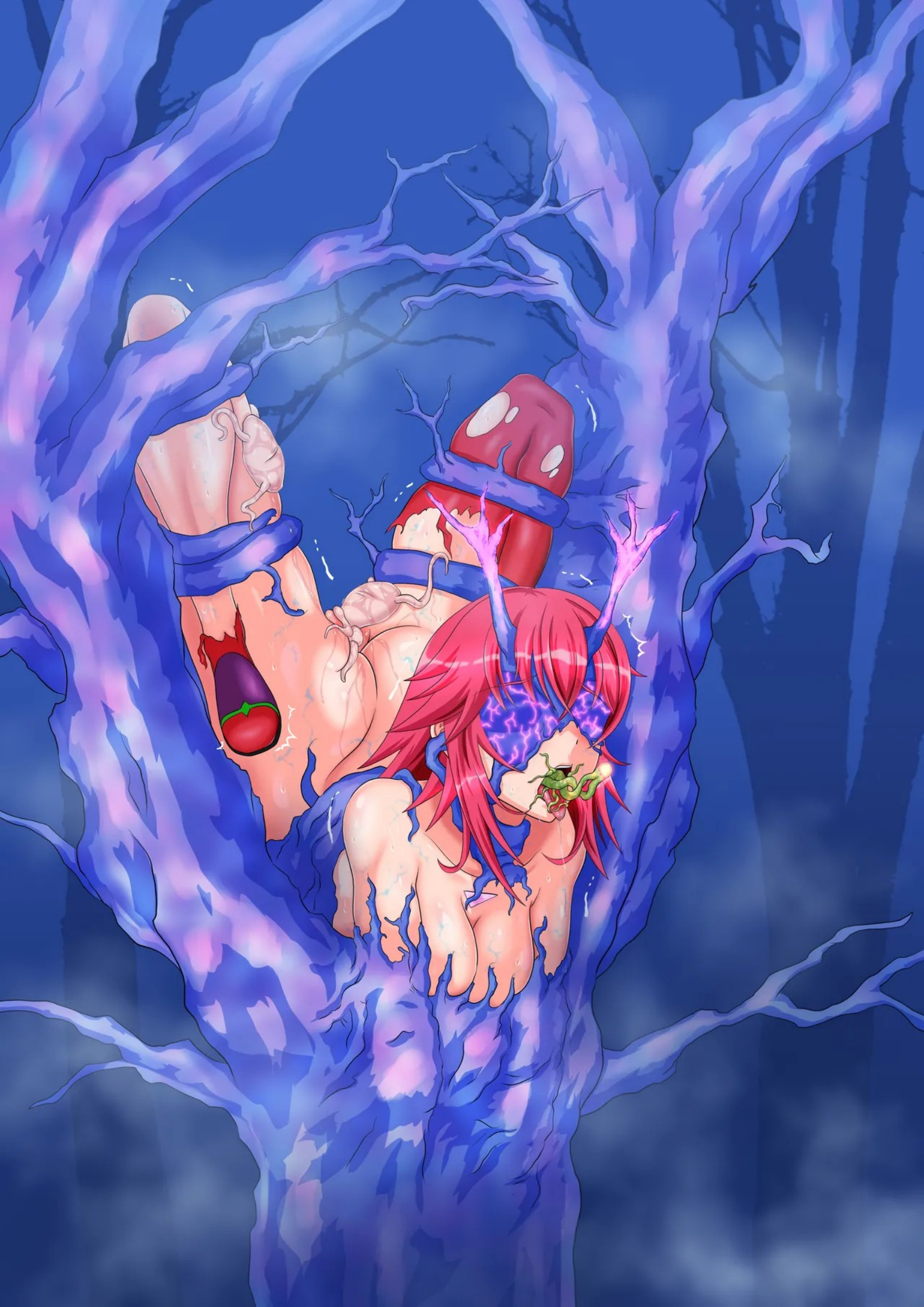


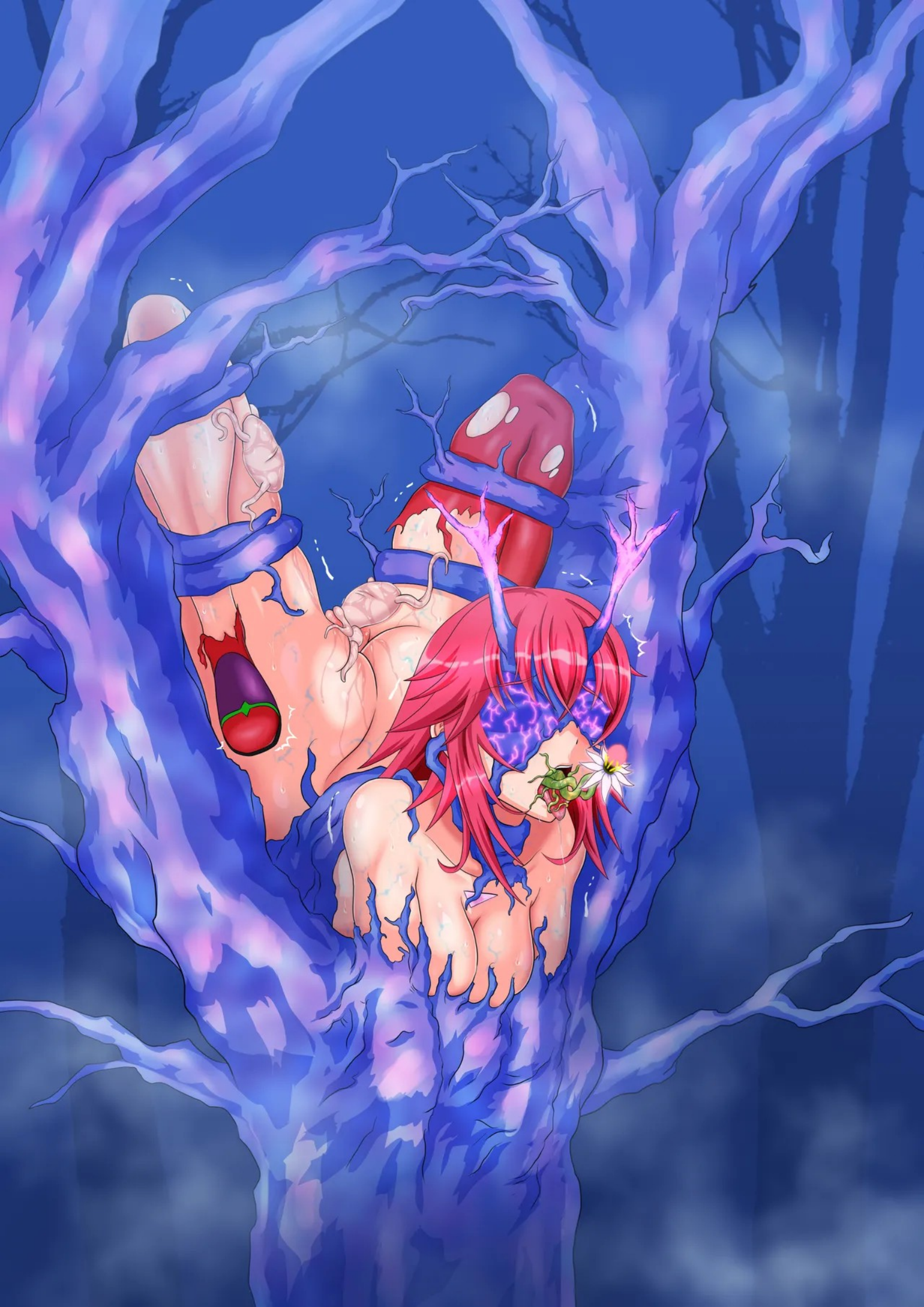




















モンス・ロディア

山一つの大きさを誇るマーゴ

本体を別次元に置き、
様々な場所に入口を作り、
迷い込んで来たものを捕らえ
山の養分とする。

樹木を变形させ
多彩な攻撃を仕掛けてくる、
小型の個体もいるが
全てはモンス・ロディアの一部である。

魔法媚薬と呼ばれる
強力な薬品を生み出す事が出来るが、
本来の能力は
パワードレインという
特殊なエナジードレインで、
エネルギーに関連する
全てを吸収する事が出来、
その者のエネルギーに
連なっているものであれば
武器でも能力でも
分解し
山の養分とすることが出来る。

最古のマーゴで
人間を取り込み自我を持った順番で
一度王に推された事があるが、
積極的に他者と関わる気が無く、
王の使命に興味が無いと
王にはならなかった、

だが王の候補になる程の
実力を持っている
強大な上級マーゴである。